

# 伊勢国府跡 7

2005年3月

鈴鹿市考古博物館

## 例言

1. 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が2004（平成16）年度に実施した国指定史跡伊勢国府跡ほか発掘調査等事業のうち伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）第19次調査の概要をまとめたものである。

2. 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体	鈴鹿市（市長 川岸光男）	
調査指導	八賀 晋（三重大学名誉教授）	
	大場範久（鈴鹿市文化財調査会会長）	
	川越俊一（奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第二調査室室長）	
	金田章裕（京都大学理事・副学長）	
	高瀬要一（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡研究室室長）	
	渡辺 寛（皇學館大学文学部国史学科教授）	
	和田勝彦（四日市市立博物館館長）	
	文化庁文化財部記念物課	
	三重県教育委員会文化財保護室	
調査担当	鈴鹿市考古博物館	
組織及び構成	参事兼鈴鹿市考古博物館長	平井茂公
	副参事兼埋蔵文化財グループリーダー	中森成行
	埋蔵文化財グループ主幹	宮崎正光
	指導主事	北条正則
	副主査	田中忠明
	副主査（派遣）	水橋公恵
	事務史員	伊藤 淳
	嘱託	吉田真由美
	嘱託	林 和範

3. 調査を実施した箇所及び面積は以下のとおりである（合計970㎡）。

Tab. 1 調査区一覧

次数	地区記号	所在地	面積 (㎡)
19次	6 A A D-A	鈴鹿市広瀬町字丸内 2609-1	220
	6 A F A-A	鈴鹿市広瀬町中土居 1290-1	200
	6 A B B-A	鈴鹿市広瀬町長塚 1275	550

4. 調査期間は2004年8月31日から2004年11月18日までである。

5. 現地調査およびは本書の編集・執筆是水橋が担当した。

6. 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕小河茂・小河清角・野口省三・水野豊・森明

〔屋内整理〕杉本恭子・別府智子・徳永由起子・坂下日向・永戸久美子

7. Plate. 1では国土地理院発行1:50,000地形図四日市・亀山の一部を使用した。

8. 今回検出した遺構は以下のとおりである。

Tab. 2 遺構一覧

SD：溝	SH：竪穴住居
262	263

9. 座標は過去の調査との整合性を保つため、国土座標第VI系を用いている。図中の方位は座標北を示す。

10. 調査区は必要に応じ、3mグリッドに分割し、北西のX・Y座標から下3桁を組み合わせてグリッド名とした。例）X=-124390・Y=45710の場合、390・710

11. 本調査にかかる遺物・図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の先生方の他に地権者ならびに地元各位をはじめ下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)

宇河雅之・木野本和之・鈴木克彦・竹内英昭・新田剛・山下信一郎・山田猛・吉水康夫・朝倉忠久  
早川千里・原和豊・広瀬町自治会・西富田町自治会・中富田町の山自治会・中富田町の町自治会

## 本文目次

I. 遺跡の位置と過去の調査	1
II. 調査の経緯と経過	2
III. 層序	2
IV. 各調査区の成果	2
V. まとめ	4

## 表目次

Tab. 1 調査区一覧	例言
Tab. 2 遺構一覧	例言
Tab. 3 調査履歴	1
Tab. 4 報告書抄録	21

## 図版・写真図版目次

Plate 1 周辺の遺跡	5
Plate 2 調査区位置図	6
Plate 3 6AAD-A区平面図、SD262平面図・土層図	7
Plate 4 6AFA-A区・6ABB-A区平面図	8
Plate 5 SH263平面・土層図、遺物出土状況・竈土層図	9
Plate 6 SH263出土遺物実測図1	10
Plate 7 SH263出土遺物実測図2	11
Plate 8 SH263出土遺物実測図3	12
Plate 9 第19次調査区遠景/6AAD-A区SD262・金藪	13
Plate10 6AAD-A区全景/SD262検出状況/SD262完掘状況/SD262土層/SD262土層	14
Plate11 6AFA-A区全景/6ABB-A区全景	15
Plate12 SH263遺物出土状況/SH263完掘状況	16
Plate13 SH263検出状況/SH263/竈付近/竈/竈付近遺物出土状況	17
Plate14 丸瓦7・8出土状況/竈内遺物出土状況/甕1出土状況/甕1出土状況/竈・炉	18
Plate15 貯蔵穴付近遺物出土状況/調査風景/甕(1)/甕(2)/甕(3)/杯(4)/平瓦(9)	19
Plate16 丸瓦(5)/丸瓦(6)/丸瓦(7)/丸瓦(8)	20

## I. 遺跡の位置と過去の調査

鈴鹿市広瀬町・西富田町、亀山市能褒野町・田村町にまたがって広がる長者屋敷遺跡は安楽川北岸の標高約50mの段丘上に立地する。当初、布目瓦の分布範囲のみが遺跡として認識されていたが、その後の調査などで、遺構・遺物の分布がさらに広い範囲にわたることが判明したため、現在では東西約600～750m、南北約1,300mの範囲が埋蔵文化財包蔵地として認定されている。平成14年度には遺跡内の3箇所が伊勢国府跡として国史跡に指定された。遺跡の現況は大半が畑地・水田である。

鈴鹿市（教育委員会）では、平成4年度から学術調査を続けており、平成7年度までに政庁全体の構造・規模がほぼ明らかとなった。平成8年度以降には、政庁周辺の調査を進め、政庁西隣で「西院」とも呼ぶうる区画が発見されている。また、北方では区画内部に瓦葺礎石建物が整然と建ち並んだ方格地割（北方官衙）の存在を確認している。方格地割については、平成6・7年度の三重県埋蔵文化財センターによる第3・2次・第4・2次調査の成果を受けて、当初、一辺約120mの略正方形区画を、東西5列、南北6列にわたって想定した復元案（宇河1996、以下「当初復元案」と呼称する）が示された。しかし、その後の鈴鹿市教育委員会

の調査で、想定された場所に囲繞施設が確認されない箇所があったため、方格地割の展開範囲を当初復元案よりも狭く考える見解（吉田2002）も提示されており、未だ範囲を確定するには至っていない。ただし、第13次調査で方格地割の南限と思しき築地側溝、第14次調査と第18・2次調査で、西限とみられる築地側溝をそれぞれ検出している。

なお、平成14・15年度に調査した政庁南方域では、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が比較的に確認されたものの、政庁と同時代のものと考えられる遺構・遺物は、極めて希薄であった（吉田2003・水橋2004）。

遺跡の基本層序は、過去の調査から、概ね次のとおりと考えられるが、耕作などによってⅡ～Ⅳ層が削平されている場所も少なくない。

- I層：表土・耕作土。
- Ⅱ層：クロボク土。
- Ⅲ層：漸移層。
- Ⅳ層：褐色砂質シルト層。
- V層：黄褐色砂質シルト層。
- Ⅵ層：砂礫混じり黄褐色砂質シルト層。

なお、周辺の歴史的環境については、既刊の概要報告に詳述されているので、そちらを参照されたい。

Tab.3 調査履歴

回数	調査年度	調査区記号	所在地	面積	調査原因	概要
7月1次	1957	A地点	広瀬町字南野		学術	礎石建物
		B地点	広瀬町字矢下			基壇
1次	1992	長塚1	広瀬町字長塚 1247,1248	110	学術	礎石造遺構
		南野1	広瀬町字南野 971	115		礎石建物
		荒子1	広瀬町字荒子 981	110		瓦溜・溝
2次	1993	6AHIF, 6AJA-Aほか	広瀬町字仲起 1226・矢下 1134ほか	238	学術	政庁後殿・東側溝・軒部・東内溝・東外溝・西内溝・西外溝
3次	1994	6AJA-Jほか	広瀬町字矢下 1131～1133	750	学術	披作土壇・西院前・西院部
3-2次	1994	県調査区	広瀬町字仲土屋、亀山市能褒野町字仲土屋	2700	県緊急	溝
4次	1995	6AJA-Aほか	広瀬町字矢下・荒子・仲起	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・西院部
4-2次	1995	県調査区	広瀬町字仲土屋、亀山市能褒野町字仲土屋	1600	県緊急	溝
5次	1996		広瀬町字丸内	133	市緊急	壁付住居・溝
6次	1996		広瀬町字矢下	288	市緊急	溝
7次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野 972,972-1,972-2,973	580	学術	独立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279-2	632	学術	御塚瓦・礎石建物・溝
9次	1997	A地区	広瀬町字矢下	21	市緊急	披作土壇部
		B地区	広瀬町字矢下	26		政庁西院部
		C地区	広瀬町字仲起	5		溝
10次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279-3,1279-5	1014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999	6AJA-Hほか	広瀬町字矢下 1176ほか	863	学術	溝・礎石建物・南門
12次	2000	6AHI-CFほか	広瀬町字仲起・荒子	1142.8	学術	独立柱建物・壁付住居・溝
13次	2001	6AHD-ABほか	広瀬町字仲起 1237,1240-1～3,1241	714.2	学術	溝・土坑
14次	2001	6AEB-AB	広瀬町字中土屋 1282-1	246	市緊急	礎石建物・溝
15次	2002	6AJJ-Dほか	広瀬町字矢下 1154ほか	1184.1	学術	溝・土坑・古墳・土塼墓
16次	2002	6AJF-Bほか	広瀬町字矢下、西富田町字東起・矢卸	3463.4	市緊急	溝・独立柱建物・土塼相墓 古墳側溝・方形周溝墓
17次	2002	6ADB-A～E	広瀬町字西野 3300	4640	市緊急	独立柱建物・溝・壁付住居
18次	2003	6AJCF	広瀬町字矢下 1126	243	学術	溝
		6AJD-E	広瀬町字矢下 1144	267		
		6ALE-A	西富田町字矢部 1015-17	21		なし
		6ALE-B	西富田町字矢部 1015-17	11		なし
		6ALC-G	西富田町字矢部 1015-15・16	48		なし
		6AEA-A	西富田町字中土屋 1283-2	360		溝・土坑
19次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内 2609-1	220	学術	溝
		6AFA-A	広瀬町字中土屋 1290-1	200		なし
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275	590		壁付住居

## II. 調査の経緯と経過

前述のように、方格地割の範囲については、当初復元案ほどの広がりをもたないことが判明してきつつある。これまでの調査からみて、どうやらその展開領域は政庁北方域にのみに限られるようであるが、範囲の詳細については、なお確定できていないのが実状である。

こうした状況を踏まえて、鈴鹿市では昨年度より方格地割の範囲確定に重点を置いて調査を進めており、西限の確定をねらった昨年度調査に引き続いて、今年度は北限の確認を最重点目標とした。このため、調査区としては、当初復元案の最も北側に想定されていた区画列のうち、西から3番目の区画（長塚北西区画の北側隣接区画）の北辺部分に6A A D-A区を、同区画の南辺部分に6A F A-A区を、さらに両調査区の中ほどに6A B B-A区を設定した（区画名については新田2004に準拠）。発掘調査は、平成16年8月31日に開始し、同年11月18日に終了した。調査面積は合計970㎡で、調査区の現況はすべて畑地である。

## III. 層序

調査地点の現況地表面は、北西から南東へ向かって緩やかに低くなっており、6A A D-A区北西隅で標高53.3m、6A F A-A区南東隅で標高51.9mである。基本的な層序は、上から耕作土（表土=Ⅰ層）・地山（黄褐色砂質シルト層=Ⅴ層）となっており、表土の厚さは10～35cm程度である。遺構検出は地山上面で行った。

## IV. 各調査区の成果

### 6A A D-A区

この調査区では、平成6年度第3-2次調査（宇河1996）で検出された東西溝S D 2・11の延長部分の確認を通して、その位置・主軸方位・時期を明らかにし、方格地割との関係を検討するための材料を調えることを大きな目標とした。

当初、S D 2のすぐ西側に、S D 2・11の方位に合わせて東西に長い調査区を設定し、同じく第3-2次調査で検出された南北溝S D 1との交点付近も調査する予定であったが、諸事情により、S D 2・11の延長線上ではあるがS D 1との交点から

外れた場所に、南北方向に長い調査区を設定することとなった。

まず、東西15m×南北55mの畑地に、4m幅で南北に49.5mのトレンチを設定し、このトレンチの北端から西へ長さ3.6m×幅1.0mのトレンチを付加し、表土の除去を行った。その結果、南北トレンチの中央南寄り、トレンチに直交する方位の溝S D 262を確認したため、検出した溝に沿って調査区を東西へ拡張した。

**S D 262** 検出面での幅1.0～1.1m、底面の幅0.4～0.6m、検出面からの深さ0.35mの断面逆台形を呈する東西溝で、長さ約12m分を確認した。これは真北と直行する東西線にほぼ合致している。この溝は、第3-2次調査で検出されたS D 2・11と同一線上で確認されており、規模・断面形状・埋土ともに類似することから同一溝である可能性は十分に考えられる。ただし、第3-2次調査S D 2・11とS D 262は、当初復元案では隣接する別区画に属しており、中間の60m程が未調査であるため断定は控えておきたい。

遺物としては、瓦片が3片出土した。

### 6A F A-A区

この調査区は、長塚北西区画の北限とその北側区画南辺付近の状況を明らかにすることを主眼として設定したもので、長塚北西区画北辺築地の残欠とみられる土塁Aの北側に隣接する東西35m×南北22mの畑地に、長さ20m×幅3mの南北トレンチを3本、さらにその3本のトレンチの南端を繋ぐ形で長さ32.5m×幅1mの東西トレンチを1本設定した。

表土除去後、精査を行ったが、遺構・遺物は何も確認されなかった。

当初、この調査区では長塚北西区画の北辺築地外溝の検出を期待していたのであるが、発掘調査に並行して地元住民や関係者の聞き取り調査を行ったところ、「数年前に、竹根の侵入を防ぐため、山（土塁A）に沿って、そのすぐ北側を重機で深く掘り返した。」との証言が得られた。表土除去の際に、土塁Aの裾付近でこの証言を裏付ける攪乱が確認されたので、長塚北西区画の北辺築地外溝は既に破壊されているものと思われる。

### 6A B B-A区

6A A D-A区と6A F A-A区の調査の結果、両調査区の間想定される区画には築地塀の存在を示す痕跡を見いだすことができなかった。しかし、

仲土居南区画のように、区画内部に礎石建物が確認されている(吉田 2002)にもかかわらず、築地塼が全周しない(水橋 2004)区画も存在するため、長塚北西区画北側隣接区画内における建物痕跡などの有無の確認を目的としてこの調査区を設定した。

東西 40 m×南北 60 mの畑地に、長さ 56~60 m×幅 3 mの南北トレンチを 3 本、その北端を繋ぐように幅 1 mの東西トレンチを 1 本設定し、表土除去・精査を行ったところ、東側の南北トレンチで竪穴住居 S H 263 を確認したため、その全体を検出するべく調査区を部分的に拡張した。

**S H 263** 一辺約 3.6 mのやや歪な方形を呈する竪穴住居。検出面からの深さは約 0.2 mである。埋土は、基本的に上層から①黒色土、②地山ブロックを多く含む黒色土の順で、②層は 4 cmほどの厚さで床面直上に広がりが認められたが、四方の壁付近では①層との区別が困難であった。この②層については、貼り床ではないかとも考えたが、特に土に締まりは認められなかった。

住居内では、中央に炉、東壁の中央南寄りに竈、南東隅に土坑が検出された。

炉は、長径 0.4 m×短径 0.35 mの楕円形を呈する被熱硬化面として確認され、検出面から約 4 cmの深さまで赤く変色していた。

竈は、基部の幅 0.9 m×奥行き 0.9 mで、高さ 20 cm程が残存していた。両袖の先端からは、焚き口側に凸面を向け、玉縁部分を上にした状態の丸瓦(5・6)が竈の袖に貼り付けられた状態で検出された。竈の焚口から炉の付近にかけては、この丸瓦の玉縁寄り部分の小片が散乱しており、人為的な破碎を思わせる。

竈の右袖は、地山類似土で構築されていて、上部と瓦(5)付近に若干の炭化物が混じる。一方、左袖は下部が黒褐色土、上部が地山類似土で構築されており、上・下部とも焼土・炭化物が多く混じる。左袖は、輪郭が非常に不鮮明で、下部が黒褐色土であることから元位置を保っていない可能性も考えたが、上部の地山類似土に瓦が貼り付けられた状態で検出されたことから、作り替えの可能性もある。

竈の埋土には焼土や炭が多く含まれており、火床の上には土師器甕の下半部(1)が、倒立状態で据え置かれていた。おそらく支脚として使用されていたものであろう。その上からは、折り重なるように土師器甕が 2 個体(2・3)出土しており、片方の

甕(3)には貯蔵穴付近から出土した破片が接合してきた。また、竈の脇(左袖の北側)から、丸瓦が 2 個体(7・8)床に寝かせた状態で出土している。土坑はいわゆる「貯蔵穴」で、1.3 m×1.0 mの不整楕円形を呈する。竪穴住居底面からの深さは約 0.15 m、埋土は黒褐色土である。底面から土師器杯(4)・甕が出土したほか、土師器甕(3)の把手と平瓦(9)が重なって、土坑の肩口に一部覆い被さるような状態で出土した。

S H 263 からの出土遺物としては、土師器・瓦が全部でコンテナケース 4 箱分ほどある。

**土師器甕(1)** 竈出土。体部が底部から直立気味に立ち上がる平底甕の下半部である。胎土は、直径 1 mm程度の砂粒を多く含む。色調は橙色。

**土師器甕(2)** 竈出土。口径 21.9 cm、胴部最大径 21.2 cm、器高 14.8 cmの小型丸底甕。内面には全面刷毛目、外面は上半に刷毛目、下半にヘラケズリが施されている。胎土は、直径 1 mm程度の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。

**土師器甕(3)** 竈および貯蔵穴肩口出土。胴部最大径約 37 cmの把手付甕である。胴部は、内外面ともに全面刷毛目が施されている。胎土は、直径 1 mm程度の砂粒を含む。色調は黄褐色。

**土師器杯(4)** 貯蔵穴出土。口径 14.7 cm、器高 3.2 cm。器表面の剥離が著しい。内面上半から口縁部にかけてと外面腰部付近に、漆のような黒色付着物が環状に認められる。胎土は、直径 1 mm程度の砂粒と赤色粒を含み、全体としては明赤褐色を呈する。

**丸瓦(5~8)** いずれも玉縁式の丸瓦で、7・8は竈脇からの出土。5・6は竈の袖に使用されていたもので、周辺から出土した細片が接合してきた。5~7は凸面に縄叩き痕が残るが、8は叩き痕跡が明瞭でない。いずれも半裁面は無調整である。5・7は明青灰色、6・8は浅黄橙色を呈し、5~7は硬質で、8はやや軟質である。

**平瓦(9)** 貯蔵穴の西側出土。凸面には縄叩き痕が認められ、凹面には横方向の調整、側縁には 2 面の面取り調整が施されている。浅黄橙色を呈し、やや軟質の焼成である。

## V. まとめ

検出された遺構は、竪穴住居1棟と溝1条である。

6 A B B - A区で検出された竪穴住居 S H 263 は、出土遺物からみて奈良時代後半か降って平安時代初期と考えられ、政府や北方官衙とほぼ同じ時期に属する可能性が高い。これまでの調査で、ほぼ同時期の竪穴住居は7棟確認されており(第5次調査で2棟、第12次調査で1棟、第17次調査で4棟)、今回で8棟目の発見となる。

これらの竪穴住居については、国府で使役された人々の住居(杉立 1997・吉田 2004)、「工房あるいは工房関連施設」(新田 2001)として国府との関連が想定されており、今回確認された S H 263 についても、その位置や時期から当然国府との関係が考えられる。もっとも、性格を解明・特定するための手がかりは、今回の調査でも得られておらず、なお今後の調査を待たねばならないが、どの竪穴住居にも建替えた痕跡がないことから、存続期間は比較的短かったのではないかとと思われる。

次に、6 A A D - A区で検出された溝 S D 262 だが、既に述べたように、この溝は平成6年度第3-2次調査で確認された S D 2・11 と同一の溝である可能性が高い。したがって、直交する溝である第3-2次調査 S D 1 を合わせて、これら規則的な配置を示す一群の溝と、築地塀を伴う区画群(北方官衙)との関係を解明することが、方格地割の北側への広がりを考える上で重要と思われるのだが、今回の調査では、対応する内溝や築地塀の存在を推測させる痕跡は何ら確認されなかった。さらに、瓦片数点しか出土遺物がないため、時期の確定ができないことも、消極的とはいえ、これらの溝と北方官衙の関連性を疑わせる材料と言えなくもない。

しかし、中世以降の遺物の出土がないことは、逆にこの溝が古代にまで遡る可能性を示しているとも評価できる。また、これら一連の溝(S D 1・2・11・262 など)の断面形態が北方官衙の築地外溝と同じ端正な逆台形であり、築地外溝と一連の設計に基づくものと考えざるを得ないほどに規格性のある平面的配置を示していることを考えれば、両者が無関係であると考えられることが不自然ではないと思われる。

このように考えてくると、「施工された箇所とプランのみが存在した箇所が部分的にあった」ので

はないかという指摘(宇河 1996)は、この遺跡を理解する上で非常に魅力的な考え方として、改めて注目される。と言うのも、これまでに築地塀の存在を推測させる内溝と外溝が対になって検出されたり、内部に建物の存在が確認されている区画は、仲土居北・南、長塚北西・南西・南東、南野南といった方格地割の中でも比較的政府寄りの区画に偏っているからである。これは、方格地割自体は広い範囲に割り付けられたものの、建物や築地塀の建設は政府に近い南側の区画から施工され、それが東西4区画×南北2区画ほどに及んだところで中断されたことを示しているのではないかと考えられ、その場合、今回調査した区画については、計画線の溝が敷設されただけで、築地塀や建物の工事が及ばないまま国府の廃絶を迎えたとの評価が可能になる。そして、もし、このように考えることが許されるならば、昨年度調査でほぼ確認できたと考えていた方格地割の西限についても、計画線については、なお西側へ延びていた可能性を考慮する必要が生じ、方格地割の西限確定にはなお慎重を要することが理解されよう。

ところで、築地塀が作られていない範囲を概観すると、区画間の道路側溝にあたる溝は片側しか掘削されていないことに気づく。あるいは、ここから方格地割の設計基準を読み取ることも可能ではないかと思われ、今後、伊勢国府跡の調査を進めるに当たっては、官衙域の設計と施工過程を明らかにする可能性を孕んでいることにも注意が必要であろう。

〈参考文献〉

- 宇河雅之 1996 『長者屋敷遺跡』『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 杉立正徳 1997 『長者屋敷遺跡(第5次)発掘調査報告』鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 平成8年度 鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 2001 『伊勢国府跡3』鈴鹿市教育委員会
- 新田 剛 2004 『速報展 発掘された鈴鹿2003』鈴鹿市考古博物館
- 水橋公恵 2004 『伊勢国府跡6』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2002 『伊勢国府跡4』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2003 『伊勢国府跡5』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2004 『鈴鹿市考古博物館年報第5号』鈴鹿市考古博物館



1. 伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡)
2. 轡音沖遺跡
3. 推定鈴鹿岡跡
4. 切山瓦窯跡
5. 古厩遺跡
6. 大鼻遺跡
7. 八野遺跡・八野瓦窯跡
8. 国府 A 遺跡
9. 三宅神社遺跡
10. 天王山西遺跡
11. 津賀平遺跡
12. 岡田遺跡
13. 川原井瓦窯跡
14. 山の原遺跡
15. 山辺瓦窯跡
16. 須賀遺跡
17. 天王遺跡
18. 伊勢国分寺跡 (推定僧寺跡)
19. 孤塚遺跡 (河曲郡衙跡)
20. 国分遺跡 (推定尼寺跡)
21. 木田坂上遺跡
22. 寺山遺跡

周辺の遺跡 (1:100,000)

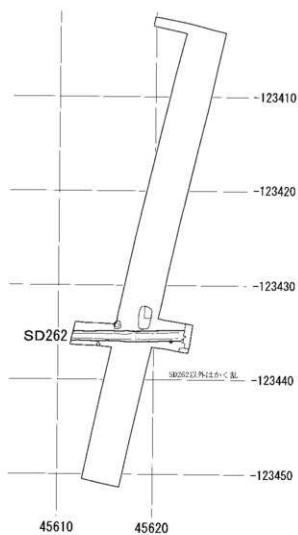


Plate.2

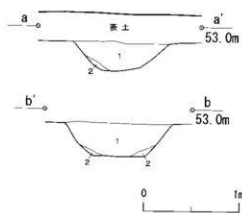


調査区位置図 (1:5,000)

6AAD-A区

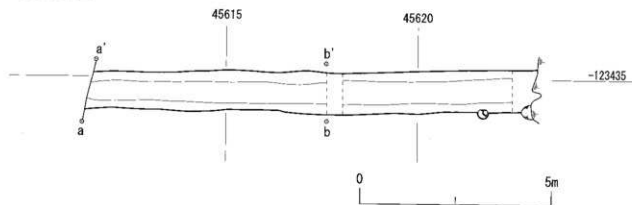


SD 262土層



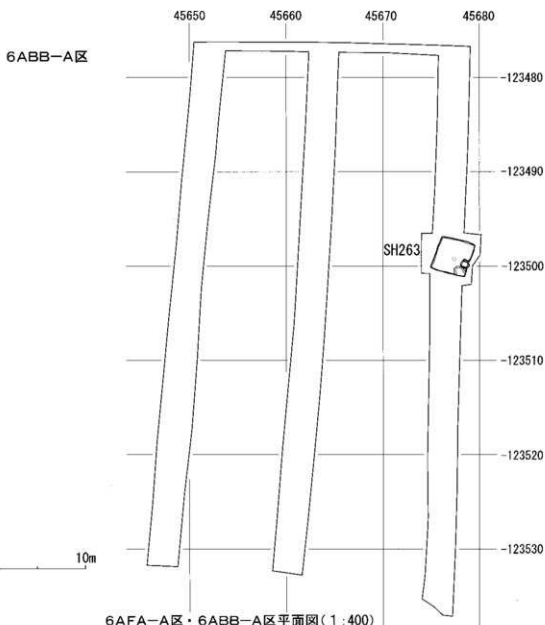
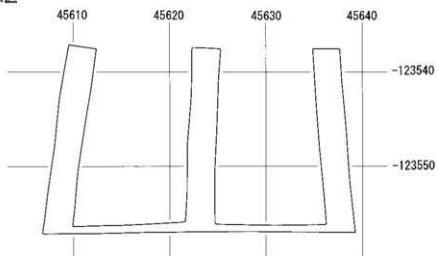
- 1 N09L7/1 表層沖上  
2 N09Z/2 原褐色粘質土

SD262平面

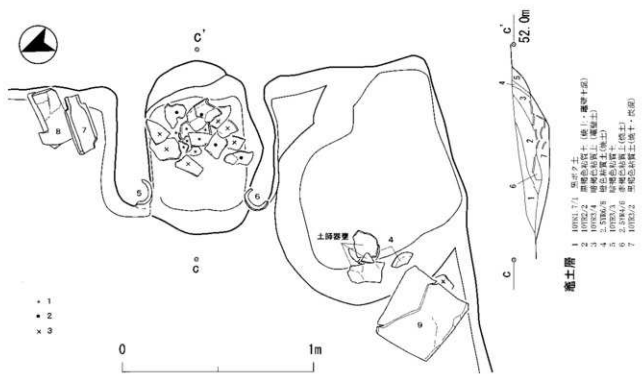
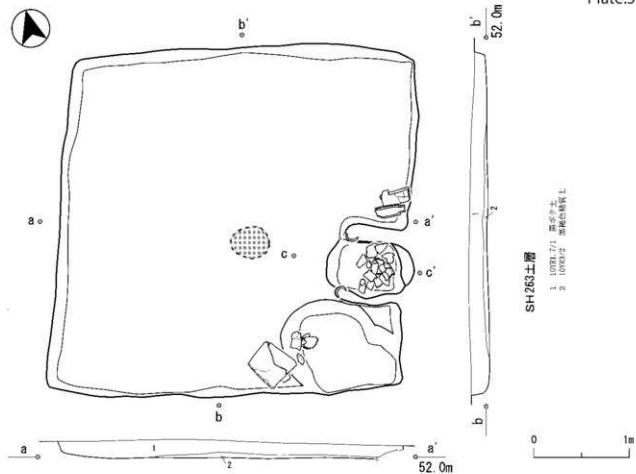


6AAD-A区平面図(1:400), SD262平面図(1:100)・土層図(1:40)

Plate.4  
6AFA-A区

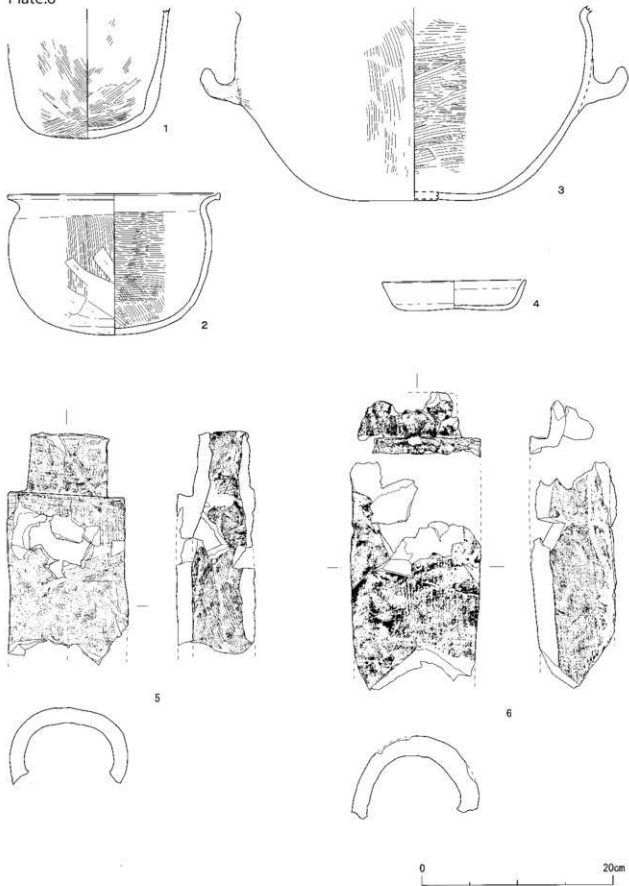


6AFA-A区・6ABB-A区平面図(1:400)

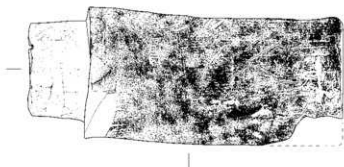


SH263平面・土層図(1:40), 遺物出土状況・石層図(1:20)

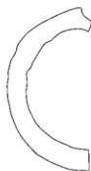
Plate.6



SH263出土遺物実測図 1



7

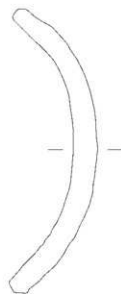
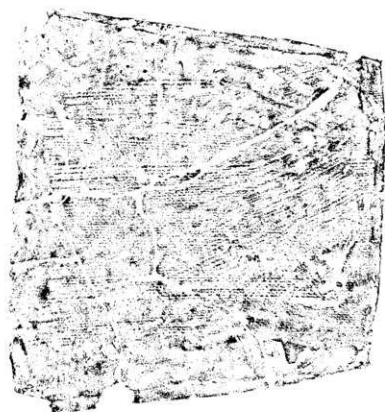


8



SH263出土遺物実測図2

Plate.8



9



SH263出土遺物要圖 3



第19次調査区遠景（北西から）



6 AAD-A区 SD262・金藪（西から）





6AAD-A区 全景（上から）



SD262 検出状況（東から）



SD262 完掘状況（東から）



SD262 土層（東から）



SD262 土層（西から）



6 AFA - A 区全景 (東から)



6 ABG-A 区全景 (北から)

Plate.12



SH263 遺物出土状況（東から）



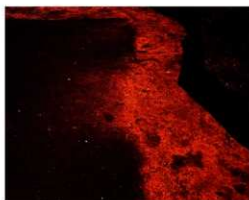
SH263 完麗状況（東から）



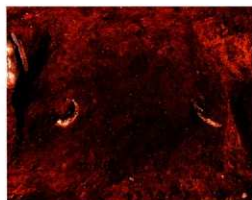
SH263 検出状況 (北東から)



SH263 (東から)



竈付近 (南から)



竈 (西から)



竈付近遺物出土状況 (西から)

Plate.14



丸瓦7・8出土状況（北から）



竈内遺物出土状況（西から）



窠1出土状況（西から）

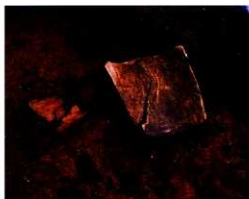


窠1出土状況（南から）



窠・炉（西から）





貯蔵穴付近遺物出土状況（北西から）



調査風景



甕 (1)



甕 (2)



甕 (3)



杯 (1)



平瓦 (9)



Plate.16



丸瓦 (5)



丸瓦 (6)



丸瓦 (7)



丸瓦 (8)



---

## 伊勢国府跡 7

---

発行日 2005年3月31日

編集・発行 鈴鹿市考古博物館

〒513-0013

三重県鈴鹿市国分町224番地

TEL 0593-74-1994

FAX 0593-74-0986

E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

印刷 早川印刷株式会社

---



# Ise Kokufu Site

Preliminary Report No.7

March, 2005

Suzuka Municipal Museum of Archaeology